

乙女溪谷 夫婦の滝（男滝）

令和3年1月11日

メンバー：坂野（L）、佐藤、草田（記）

暖かかった昨年、一昨年とは打って変わり、今年は冬らしい冬となった。私が生まれる頃は毎冬こんな感じだったのだろうが、今ではたまに寒波が来るだけで、やれ最強寒波だ、やれ浜松でも氷点下の日々だ、と大騒ぎ。高速道路では車が毎週のように立往生し、ついには暖房器具の使い過ぎで電力不足も懸念される始末。アイスクライミングをする人間にとっては、優しくない時代になったなと苦笑いをしながら、我々は乙女溪谷へ向かった。

乙女溪谷キャンプ場の駐車場で佐藤さんと落ち合い、各自準備をする。坂野さんと私は前日濁河温泉にごりごおんせんで肩慣らしをしたが、佐藤さんは今シーズン初めてのアイスクライミング。いきなり大丈夫かと心配になったが、リーダーの坂野さんが「夫婦の滝が凍ること自体が（恐らく3年ぶり）珍しいから、とりあえず一目だけでも見てみよう」と言って、決行することに。



夫婦の滝へのハイキングコースは、脛ほどまで雪が積もっていたものの、トレースがあるのでラッセルは必要なく、ありがたかった。ただ、木製の遊歩道がいたるところに整備されており、そこに雪が積もっていると歩きづらい。階段部分はむしろ傾斜がきつすぎて、四つん這いにならないと滑って歩けないほどであった。ストックを持ってくればよかった、と幾ばくか後悔をしながら、無心で先へ進む。登り口から約2km、標高差はおよそ500m。二ノ谷をたどるこのコースは、単調で意外と長い。先客かと思われる12本爪アイゼンの真新しい跡をたどりながら、汗だくで二時間弱。ようやく目の前に男滝が見えた。

展望台から見る男滝は、写真で見るよりも雄大だった。

——あれに登るのか。

ゆっくり目を瞑り、目の前の滝に登る姿を想像してみる。が、全く想像がつかなかった。アイスクライミングを始めて3年目。今まで見たどの滝ともスケールが違う。

——すげえ。

私は滝を見ただけで、半ば満足をしてしまった。もしリーダーがこの瞬間に「帰るぞ」と言ったら、私は迷いなく引き返しただろう。そして仮にそのまま下山したとしても、きっと満足な山行だったと思う。

しかし現実とは違う。後ろ向きな佐藤さんをよそに、リーダーはハーネスを付け、アイゼンを履き、黙々と準備を進める。そして最低限の荷物だけをもって滝の真下まで向かった。トレースはもうない。腰ラッセルをしながら、取付まで進んで

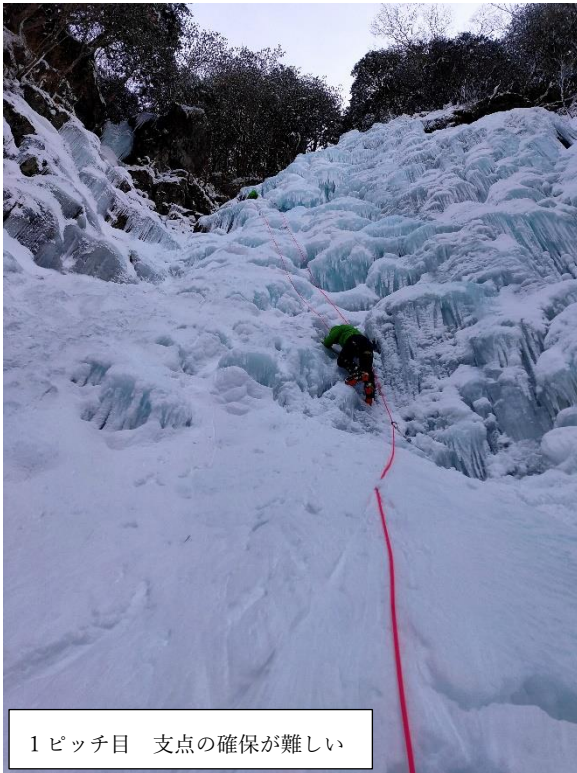


取付までの最後はラッセル



いく。そうして滝の下に着くと、先ほどまでと違うように見えた。これなら登れる、と。

展望台から見る男滝は、バーティカルに近い80mの大滝に見えたが、下部から見上げると緩やかなカリフラワー状に見える。氷の厚さもそこそこあり、どこだって登れそうだ。リードをする自信はなかったが、ここをノーテンで行ければ間違いなく今後の自信になる。私は密かに目標を立て、ビレイデバイスを取り出した。

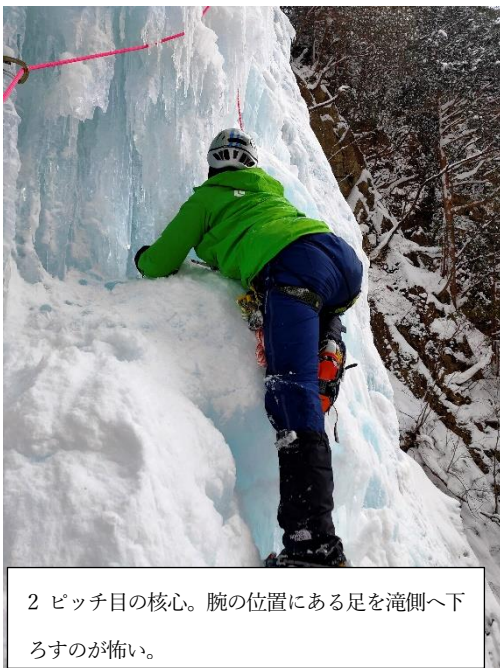


1 ピッチ目 支点の確保が難しい

リーダーがワンピッチ目に取り掛かる。一手一手軽やかに登っていく。その速さと美しさに見惚れながら、全長の半分ほどの所でピッチを切った。次いで佐藤さんが登り、最後に私が支点を回収しながら登り始めた。

登り始めると想像通りの難易度だった。ただ、支点がおかしい。スクリューがうまく刺さらない場所が多らしく、氷柱にスリングを巻いてランナーを取っている場所もあった。登攀技術というのは、単純に登る能力だけではないというコトを改めて思い知らされる。そしてワンピッチ目の終了点まであと 10m ほどになった頃、急に難易度が上がった。雪のせいでアックスの刺さる場所が限定される。それでも落ち着けば

なんてことない程度なのだが、足場を探す時に見える高度感が、焦りを生む。慎重に、確実に。そう分かっているにも、急に難しくなる。最後はよじ登るかのような醜悪な恰好ながら、なんとかワンピッチ目を終えた。



2 ピッチ目の核心。腕の位置にある足を滝側へ下ろすのが怖い。



テラスから取付を除く

ツーピッチ目が始まる。最初から核心。右へトラバースをしながら、足を安定した場所から滝側へ、クライムダウンをするかのように出さなければならないのだが、それが怖い。セカンドなのだから落ちる心配はないのだが、それでも怖い。なんとか最初の核心を超え、次は5mのパーティカル部分へ挑む。足はなるべく高めに上げ、体勢と足で登っていく。

——よし、超えた。

そこからは傾斜が緩やかで、あと約25m、もう核心はないかと思われた。しかし、それは違った。



右岸(滝と見合って左側)を回り込むようにして登り、最後の10m、落ち口が見えると一瞬固まってしまった。薄い氷から透けて、水が流れているの見える。

——嘘だろ。

アックスを刺すと、かかっているが、刃先から水が漏れ出てくる。いくら私の体重が軽いとはいえ、全体重をアックスに預けるのは危険だ。幸い左側の氷は少し厚めだったので、苦手な左に頼るように登っていく。

——右手は体勢を整えるために、そして荷重は三点に分散して。落ち着いて。

慎重に登っていく最中、私はふとここをランナウトで登っていくリーダーの姿が頭をよぎった。この脆い氷に己の全てを預けて登っていく。その恐怖感は、きっと筆舌に尽くしがたいものだっただろう。やっとの思いで落ち口にたどり着き、二人の姿を見た時、私は思わず叫んでしまった。

左岸を5mほどよじ登るとトレースがあり、帰りはそこを下って行った。^{こひでやま}小秀山へ登った人のトレースだろう。取付へ戻り、荷物をまとめ、暗くなる前にと足早に下山していく。途中で振り返ると取付が見つからなかった女滝を見つけたが、果たして登る機会は訪れるのだろうか。疑問は疑問のまま胸にしまう。そしてその隣の男滝を見つめる。今朝見た時には、あそこを登れるとは思わなかった。いや、今見ても信じられない。でも、私は確かに登った。

そしてそこで自信と誇りを手に入れたのだった。

《コースタイム》

8:10 キャンプ場 — 9:10 避難小屋 — 10:00 男滝 — 11:00 登攀開始 — 15:40 登攀終了 — 17:40 キャンプ場

